

第四章 退化

第四章 退化

「進化のなれの果てが人間なのね」

「そう。その中でも独裁者がぶっちぎりのトップ」

「私は独裁者じゃないし、運動会の駆けっこはいつもベッタだったわ」

「俺もだ。何故イリと気が合うのか分かったぞ」

「あまりうれしくない」

「まあまあ。さて道具を使って悪知恵を働かすのが人間。頭がいいから道具を造ったけど使い方になっていない」

何人かの人間が槍を持って大きなマンモスと戦う立体映像が二人の前に映し出される。

「いつの間にかこの槍が人間同士の戦争に使われる」

「道具が武器になる……」

イリがため息をつく。

「道具とはモノを作ったり仕事をはかどらせるときに使う器具の総称。なんて言ったりするけれど器具とはなんだ？ 道具と呼ぼうが器具と呼ぼうが武器は武器だ。素手で戦うより手っ取り早い」

第四章 退化

「武器がなければ戦いは起こらない？」

「武器をなくすにはどうすればいいか。分かるか？」

「武器を作らないというルールを作る」

「分かっているなあ」

「どうせ私はバカよ」

「そのバカが道具を武器にするから戦争になるんだ」

イリの表情が急変するのを見てノロは逃亡体勢を取る。

「攻められるから仕方なく防御するのよ。ウクライナーがそうでしょ！」

「武器がないからご自由にと言ったら、征服されて奴隷になるだけだなあ」

「だから徹底抗戦するんだわ」

「ケリが付くまでどうしようもない。戦争は悪知恵の総力戦。当事者同士もそれぞれの応援団

も悪知恵を出し合う。平和へのアイディアなんか絶対出ない。お互い倒れるまで殴り合うんだ」

「でも核兵器があるわ」

「それを使えばおしまい。だから俺は地球を出た」

「でも核兵器を始末したじゃないの。原子炉もなくしたわ。地球にいても良かったのに」

「悪知恵まで始末できない。それに道具は残ったまま」

ノロは体勢を緩める。

第四章 退化

「どうしようもないのね」

イリがいったん落胆するがすぐにあることに気づく。

「投げ出したのね！ ノロは人間を見放した！」

ノロは平然とイリを見つめる。

「そのとおり」

イリは目を丸くしてから白目をむく。人間を愛してやまないからノロは数々の発明を通じて人類を救おうとした……と思っていた。その確信が大きな音を立てて崩れ落ちた。まるでウクライナの主要都市がロシアに破壊されるように。

そしてどんなときもネガティブになることはなかったノロの異変に気づいたイリは何らかの病がノロの心を犯しているのではないかと心配になる。

「じゃあ、どうするの？ 何かいいアイディアがあるの？」

すぐさまノロが返答する。

「退化させればいい」

「退化？」

イリが間を置く。

「猿に戻す？」

「そうだ。枝で地面を叩いて音を立てて喜ぶ程度まで退化させるんだ。毛むくじやらになれば

第四章 退化

ほかの動物の毛皮を剥ぐために殺すことはしなくなる。それに火は使わせない」

すぐには理解できないがイリは何とか声を出す。

「ミンクを殺してコートにした。確かに人間って勝手だわ」

「それは女だ」

イリの表情がこわばるのを察知したノロは言葉を連発させる。

「猿になれば服を着たり脱いだりしなくて済む。パンツをはきかえなくて済む。と言うことは洗濯しなくて済む。これは非常に快適な生活だ」

イリは「不潔」と言いかけて飲み込む。そして頭をフル回転させてノロの考えを引き出す言葉を考えるが、口から出たのはでたのはごく自然な言葉だった。

「どうやって退化させるの？」

「まず、かの有名なダーウィン博士に『進化論』は間違っていたと反省論文を書いてもらう」

この言葉で緊張感が切れたのかついにイリはプイと横を向いてノロに背を向ける。

「真面目に聞いていた私がバカだったわ」

ドアに向かおうとするイリの目の前に「退化論」と題した本の浮遊映像が現れる。

「俺はいつだって真面目だ」

イリは黙って戻る。

*

第四章 退化

「退化論」の本の前書きはノロが書いていた。短いから引用すればいいのだが要約する。

愛することと憎むこと。切っても切れないこの二つの情のうち「愛する」ことだけを残す。ライオンは憎んでシマウマを殺すわけではない。仲間同士で縄張り争いをするが仲間を憎んでしているわけではない。命を子孫に繋ぐという究極の愛を目指す。一方、縄張りから追い出されると死が待ち受けている。それでも地球は命あふれる美しい星であることに変わりはない。「俺はそんな地球を造りたかった。いや一から造りたい。いや、そうじゃない。ゼロから造りたいのだ」

ノロの迫力にイリは再び後ずさりする。ノロは急に口を横に開いてニターツと笑う。いつものノロの表情に戻る。イリは騙されまいと身構えるが、このノロの表情が好きで騙されると分かっている。近づいてしまう。

「要は老化の促進および長寿ではなく短寿の勧めだ」

「ノロらしくないわ。何を言いたいのか分からない。どこかの国の首相と同じだわ」

「だけど『退化論』と言ってもよく分からないだろ」

「よく分かるわ。要するに人間をバカにすればいい。バカになれば大量殺人なんかできっこない」

ノロが急にうつむく。

「バカが学校でライフル銃を乱射しても何万人もの犠牲者は出ない。でも犠牲者が一人であっ

第四章 退化

「ても悲しいことなんだ」
イリは頷くだけだった。